

和洋女子大学
デジタル・データサイエンス教育プログラム
自己点検・評価報告書

2022(令和4)年度

和洋女子大学では、2022年度より「デジタル・データサイエンス教育プログラム」を開始しており、企画・運営はデジタル化推進プロジェクトチーム（DXPT）が担当し、その自己点検・評価を大学・大学院評議会にて実施している。

2022(令和4)年度の自己点検・評価結果は、以下のとおりである。

項目	点検結果	評価
履修・修得状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必須科目「パソコンの基礎と応用（講義コード：1061）」 共通総合科目 履修者数(後期):32名 修得者数:26名 修得率:81.3% [履修者数(学部別)] 人文学部 21名、国際学部 1名、家政学部 10名 ・ 選択科目「数理と発想（講義コード：1318）」 共通総合科目 履修者数(後期):9名 修得者数:7名 修得率:77.8% [履修者数(学部別)] 人文学部 6名、家政学部 3名 ・ 選択科目「日本語学特殊演習Ⅰ」 日本文学文化学科専門科目 履修者数:43名 修得者数:43名 修得率:100.0% ・ 選択科目「心理学統計法」 心理学科専門科目 履修者数:77名 修得者数:71名 修得率:92.2% ・ 選択科目「観光文化と分析」 国際学科専門科目 履修者数:57名 修得者数:53名 修得率:93.0% ・ 選択科目「栄養情報処理実習」 健康栄養学科専門科目 履修者数:166名 修得者数:149名 修得率:89.8% ・ 選択科目「保健統計学」 看護学科専門科目 履修者数:87名 修得者数:87名 修得率:100.0% ・ 選択科目「保健医療情報学」 看護学科専門科目 履修者数:40名 修得者数:38名 修得率:95.0% 	B
学修成果	<p>「パソコンの基礎と応用」では、授業評価アンケート※の総合満足度や社会に役立つ専門力が向上した項目などで平均値を上回り、自由記述でも「Word や Excel の基礎知識から応用まで学べて良かった」「実践しながら学べたので理解できた」「教員の説明がとても分かりやすく、スムーズに学ぶことができた」等の意見が見られ、履修した学生が概ね満足していることが伺えた。</p> <p>今後は、全学的に学生の学修成果を数値的に可視化するシステムの導入を予定しており、本プログラムにおいても学生の学修成果の発展度合いを数値的に可視化できるようになるものと期待される。</p> <p>※授業評価アンケート： 全授業を対象に実施(評価の対象として有意性を欠く少人数(10人以下)の授業は除外)。 各質問項目を点数化する評価に加え、自由記述欄には項目に該当しない部分の意見や、数値で表されない質的な評価の観点も加味されている。</p>	A
授業評価アンケート等を通じた学生の内容の理解度及び後輩等他の学生への推奨度	<p>プログラム科目における授業評価アンケートの総合満足度は、全体平均値よりも高い結果であった。2022(令和4)年度は面接とオンデマンドの併用で授業展開されたが、面接授業内で学生が質問できる時間や環境が整えられていることのみならず、オンデマンド授業による自己学習の時間が確保されることにより学習の相乗効果が生まれ、授業の運営時間や学習量が適切であることが示されている。これらの要因から、学生自ら積極的に課題や試験に取り組めたという評価結果を得られている。</p> <p>今後は、修了学生から体験を聞く機会の準備や、プログラムを通して身につく力を明確に周知する等、学生が本プログラムに興味を持つ対策に取り組む。</p>	A

項目	点検結果	評価
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>2022(令和4)年度のプログラム履修者は延べ553名おり、内474名が1科目以上を修得した(科目修得率85.7%)。</p> <p>履修率向上に向けて、全学部・学科で履修可能な「パソコンの基礎と応用」「数理と発想」について、1年生を中心にオリエンテーションでチラシ「DX(デジタルトランスフォーメーション)の社会へ向けてデータサイエンス・AIについて学んでみませんか?」を配布、教務課履修ガイダンス内で説明、manaba course(オンラインプラットフォーム)で発信する等の周知を行った。しかし履修者の増加は芳しくなく、特に「数理と発想」においては履修者が少人数にとどまった。</p> <p>近年、入学学生のパソコンスキルの向上(中高での情報教育の普及)にともない授業も高度な内容にシフトしてきているが、「パソコンの基礎と応用」では基本的なスキルから習得しようとする学生に対して「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」の理解に注力している。また「数理と発想」は、その科目名から敬遠されがちではあるが、身近な話題に引き付けて、とくに数理・AIの理解に必要な微分関数やベクトル、行列などの内容を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させるような方法で教示する工夫がなされていた。</p> <p>今後は、データサイエンスに興味を持つ学生が身につけるべき科目として、多くの学生に受講を勧めていき、プログラムの認知度が高まるにつれて、履修者数が増加していくことが見込まれる。</p>	B
プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>プログラムを開設して間もないため、修了者の進路、活躍といった点に関して実績がないため、今後の取組について点検した。</p> <p>本学では毎年、卒業生が就職した企業を招いて企業懇談会を実施している。新型コロナウイルスの感染拡大により2020(令和2)年度からは中断していたが、2023(令和5)年度から再開する計画である。企業から本学卒業生の状況を聞くことができる貴重な機会となっており、今後は本プログラムの導入によりデータサイエンスの知識をもった多くの学生が活躍できるようになることを紹介し、また本プログラム修了生が就職先でどのような状況・効果を発揮しているか聞き取りが行えると期待される。</p>	—
産業界からの視点を含めたプログラム内容・手法等への意見	<p>本学では毎年、地域連携協議会を開催している。市川市の諸団体及び市民との連携・協働を推進し、市川市における経済・産業・文化等の諸活動を発展させること、ならびに本学の教育研究を充実させることを目的に行っている。本学から学長、副学長、学部長、事務局長等が参加し、地域からは包括連携協定を締結している市川市および地域企業の関係者を加え、地域自治体および企業との意見交換を行っている。プログラムを立ち上げた2022年9月以降、地域連携協議会が開催されていないため振り返りができていない(次回2023年8月開催予定)。今後は、地域連携協議会にて本プログラムの内容や手法等について意見を伺う機会を設け、産業界からの意見等を参考にDXPTと全学教育センター、大学・大学院評議会で連携し、授業の改善・見直しについて継続的に検討をしていく。</p>	C

(評価基準)

S	目標を大幅に上回る成果を上げた
A	目標を上回る成果を上げた
B	ほぼ目標通りの成果であった
C	目標を下回る成果であった
D	目標の成果を全く上げられなかった

以上